あとがき

筆者が担当した東横堀川・道頓堀川は、大学を卒業して大阪市へ就職してから10数年採水･分析･汚濁対策に従事した懐かしい地点である。1960～1970年代のそれらの河川は、他の大阪市内河川と同様に、水質は非常に汚濁しており、BOD年平均値は20～30mg/Lを推移していて、溶存酸素は冬季を除いてほとんど存在しない状態であった。中でも、道頓堀川は、大黒橋で1968～1971年頃河川水直接浄化実験をした川である。直接酸素(空気)を吹きこんで浄化しようとした。これらの実験結果が活かされて、戎橋一帯にエアレーションが設置されていたが、歩道橋工事のために2004年に取り外された。その後、公害対策基本法(環境基本法)制定など国をあげての努力の結果、格段の水質改善がみられている。川部会で皆さんと一緒に散策をした他、今回稿を起こすにあたって、幾度も探索をし、新たな発見も少なくなかった。コラムでも述べたが、北浜逢坂貯留管が完成して、合流式下水道の流入が無くなり、一層の水質改善によって、透明感があり、水泳もできる河川に生まれ変わることを期待したい。

(社)日本水環境学会関西支部川部会／福永　勲

参考文献

・大阪市ホームページ歴史の散歩道、上町台地コース、コラム2「水の都」大阪
　http://www.city.osaka.lg.jp/kensetsu/page/0000009775.html
・大阪市ホームページ道頓堀川水門・東横堀川水門
　http://www.city.osaka.lg.jp/kensetsu/cmsfiles/contents/0000010/10856/02J.pdf
・大阪市ホームページ「太閤下水」 http://www.city.osaka.lg.jp/kyoiku/page/0000009095.html
・内閣府都市再生レポート(No,2,2005.3.15.) http://www.toshisaisei.go.jp/06report/pdf/02.pdf

〔写真提供〕

・大阪市建設局（太閤下水）
・大阪城天守閣蔵（『浪花百景』のうち「四ツ橋」）
・財団法人　大阪観光コンベンション協会（中之島、宗右衛門町）

既刊の紹介

・みやびな川 編　　『白川』(2010)
・歴史とロマンの川 編　『瀬田川・宇治川』(2010)　『保津川・桂川』(2011)
　『芥川』(2011)

(財)琵琶湖・淀川水質保全機構
〈企画編集〉(社)日本水環境学会関西支部川部会
(社)近　畿　建　設　協　会

琵琶湖･淀川　里の川をめぐる
～ちょっと大人の散策ブック～〈なにわの川･庶民の川 編〉

東横堀川・道頓堀川 (Higashiyokoborigawa･Dohtonborigawa)

〔発　行〕平成23年12月
〔発行者〕財団法人　琵琶湖・淀川水質保全機構
〒540-0008 大阪市中央区大手前1-2-15 (大手前センター ビル4F)
TEL. 06(6920)3035　FAX. 06(6920)3036
<ホームページ> http://www.byq.or.jp/

©BYQ, 2011 Printed in Japan

「　飲める水　遊べる水辺　次世代に　」

琵琶湖･淀川　里の川をめぐる

～ちょっと大人の散策ブック～

なにわの川･庶民の川 編

東横堀川・道頓堀川

(Higashiyokoborigawa・Dohtonborigawa)

(財)琵琶湖・淀川水質保全機構
(社)日本水環境学会関西支部川部会
(社)近　畿　建　設　協　会

「琵琶湖・淀川流域散策ブック」のねらい

(財)琵琶湖・淀川水質保全機構、(社)日本水環境学会関西支部川部会と(社)近畿建設協会は、大都市圏の川を水質という側面だけではなく総合的に把握し、その機能を再評価するために川部会が2001年より行ってきた活動の成果を基礎に、「琵琶湖・淀川流域散策ブック」をまとめることになった。

この散策ブックは、琵琶湖・淀川流域の河川を散策する時に気軽に携帯できるガイドブックを意図して作られており、対象河川の概要はもとより、流域の見どころ、名水や滝、水質や生物、その川にまつわる興味深い話などが、豊富な写真や地図を用いて解説されている。

散策ブック全体は、「源流を行く」、「おうみの川」、「みやびな川」、「歴史とロマンの川」、「なにわの川・庶民の川」の5編で構成され、それぞれ5、6リーフレットからなる。本リーフレットでは、なにわの川・庶民の川編として、大阪市内繁華街を流れる東横堀川・道頓堀川を取り上げた。

本ブックシリーズが、琵琶湖・淀川流域の河川に親しみを感じ、流域を散策するための一助になることを願っている。

目次

CONTENTS

ねらい・目次

東横堀川・道頓堀川の概要 …… 02

東横堀川 …… 03

コラム１　大阪八百八橋が夢の跡 …… 05

コラム２　水門操作による水質管理 …… 08

道頓堀川 …… 10

コラム３　戦前から水質調査 …… 12

コラム４　多くの市民による河川保全 …… 14

（表紙写真／ネオンがきらめく夜の道頓堀川）

1 東横堀川・道頓堀川の概要

大阪市域は北に神崎川、南に大和川、東に生駒山系から流れ出た諸河川、西に大阪湾に囲まれている。その中で大阪市内の河川は、琵琶湖淀川水系の最下流に位置し、淀川水系、寝屋川水系を中心とした諸河川からなっている。ここで紹介する東横堀川・道頓堀川は、大阪市内でももっとも繁華な街を流れて人々に親しまれている。

東横堀川は、地図にあるように土佐堀川から分れて、昔太閤秀吉が大阪城の外堀として開削したもので、長さ約3kmの大阪市管理河川である。それに続く道頓堀川は、江戸時代船場等の発達と合わせて、商工業の発展のために安井道頓が開削したもので、長さ約2.5kmの同じく大阪市管理河川である。

現在、大阪市は新「水の都・大阪」を創造するために、道頓堀川下流部と東横堀川に水門を建設して、水質を改善し、水面を一定に保ち、同時に防潮機能も備えるように図っている。また、道頓堀川の一部では、両岸に遊歩道を設け、水辺の歩行者空間として、水との距離を80cm程度にまで近づけて整備され、親水性を高める工事を進めている。市内随一の繁華街だけに、水質も含めて、親水性など一層のアメニティーの創生が期待される。

以下では、東横堀川・道頓堀川の入り口水辺を含む東横堀川、道頓堀川に分け、散策コースを紹介する。

東横堀川・道頓堀川流域図

2 東横堀川

淀川は、有史以来幾度となく大阪に洪水をもたらしてきた。これを防ぐために、淀川を直接大阪湾に流入させようと、1907(明治40)年毛馬から新淀川が開削された。現在、大阪市内河川水質・景観を維持しようと毛馬の閘門で調節された一定量の水量が市内へ流され、中之島で堂島川と土佐堀川に分かれ、さらに東横堀川が分流している。とくに、この中で淀川の毛馬の閘門から中之島で二つに分かれるまでは、大川と呼ばれ、旧淀川の通称である。この付近一帯では、夏の天神祭や市民レガッタなど大阪の川を舞台とした行事が行われ、四季の風物詩として市民に親しまれている。

東横堀川は元々東側にある大阪城の外堀(とくに惣堀と言われた)として1585(天正13)年開削されたもので、その他外堀には東に猫間川、南に空堀(冬の陣で埋立)、北に淀川・旧大和川があった。

市内河川を走るアクアライナー

八軒家浜船着場跡

東横堀川が分流する土佐堀川（左）と堂島川（右）

熊野街道起点を示す碑

大阪城

京橋川魚市場跡碑

難波橋のたもとのライオン

難波橋の向こうに中央公会堂などが見える

東方には天神橋が見える

東横堀緑地の石標

東横堀緑地と東横堀水門

東横堀川入り口付近について、土佐堀川左岸側から上流に、京阪天満橋駅(旧松坂屋)があり、寝屋川が流入する京橋に至る。このあたり一帯は、八軒家浜といわれる。とくに、平安時代京都から淀川を下って、ここで上陸して熊野街道を通って熊野参りをした。いわゆる王子の始まりで、熊野街道起点の碑がある。江戸時代には、三十石船が行き交い、京都と交流した。上述アクアライナーの八軒家浜乗り場も出来ていて、近くには八軒家浜船着場跡という案内板もある。さらに東へ進むと、寝屋川が合流する京橋に至り、この付近からは大阪城も望め、またこの付近に京橋川魚市場跡碑もある。

まず、東横堀川への入り口の葭屋(よしや)橋を渡って、ふれあいの岸辺に立つと、大川(旧淀川)が中之島公園を境に堂島川と土佐堀川に分かれるあたりが見える。西には、たもとでライオンが見守る難波橋、東に一つの名前で橋が左右に分かれている天神橋が見える。また、川向かいには中之島公園という水辺環境、中央公会堂などの由緒ある建物群が眺められる。ほとんどの護岸が鋼矢板である大阪市内の岸辺の中でも、中之島公園はコンクリートの傾斜護岸で最も水に近く、垣で隔てられてはいるが行こうと思えば直接水に親しむことができる近さである。ただ、これらを遮るのが阪神高速道路で、美しい景観とは相容れない。この阪神高速道路は、堂島川、土佐堀川を横切り、川の真上をふさぐようにして東横堀川の最後の橋である上大和橋まで無粋に川の中に橋脚を突き立てながら走っている。

その東横堀川沿いに歩く。再度葭屋橋を渡り、今橋、高麗橋を左に見て川の西側を南に向かう。東横堀川緑地の石標の所で左に折れ川沿い

の河川公園へ下りる。ここに、**東横堀川水門**とマイクロストレーナーがある。この水門の役割については、コラム2で詳しく紹介している。マイクロストレーナーは、そのメッシュが10μm程度で、浮遊物質を除去することで水質改善し、汚濁水は下水道へ捨てられている。

先に通った**高麗橋**は、江戸時代の公儀橋12橋の一つで、橋の東側に西日本各地への**里程元標**がおかれていた。里程元標は、京街道、中国街道、紀州街道への車馬賃などの起点となった。また、高麗橋は、12公儀橋の中でも最も重視され、西詰には町奉行所がおかれていた。現在の里程元標は、国道1号線と2号線の接点である梅田新道交差点西北角におかれている。その他高麗橋

西日本各地への里程元標

高麗橋記念碑

大阪銀座跡碑

コラム ① 大阪八百八橋が夢の跡

大阪が天下の台所と呼ばれた江戸時代は、経済活動が活発になるにつれて、堀割の開削とともに今の船場などの土地が造成された。水運も発達し、河川、つまり堀割が張り巡らされ、西国諸国や北前舟からの米や昆布などの諸物資の搬入地となって、諸藩の蔵屋敷が軒を連ねていた。八百八橋と称されるほどの多くの橋も架けられた。実際は、江戸時代は、公儀橋と呼ぶ幕府直轄の12の橋を含めて橋の数は300にも満たなかった。むしろ明治以降、産業の発達とともに、最盛期には1,600ほどの橋があったらしい。現在は、約700ほどである。

一方で、明治時代の末期から必要に応じて、河川の埋め立てもおこなわれてきた。とくに第二次世界大戦後、急速に陸運が盛んになると共に、水運の比重は小さくなり、河川の水質汚濁がひどくなって、多くの堀割が埋め立てられていった。しかし、往時の河川や堀割による水上交通は、大阪の文化をつくってきた土台であり、その意味を今に伝えようとして遺跡や石碑が各所に残されている。また、心斎橋筋や長堀通などが大阪市内の有名地点名として残っている。

①天満堀川 ②長堀川 ③高津入堀川 ④難波新川 ⑤西横堀川 ⑥江戸堀川 ⑦京町堀川 ⑧海部堀川 ⑨阿波(座)堀川 ⑩立売堀川 ⑪薩摩堀川 ⑫堀江川 ⑬いたち川 ⑭十三間川 ⑮曽根崎川

〔大阪市内河川埋立跡図〕

藤沢東がいが開いた泊園書院跡碑

釣鐘屋敷跡に立てられた釣鐘堂

忠臣蔵で有名な天野屋利兵衛の碑

薬王寺

西町奉行所跡の碑

大阪活版所跡碑

本町橋の江戸時代からの橋柱

の東方、東高麗橋2丁目には江戸時代の**大阪銀座跡**があり、生野・石見の銀を京都へ運んだりした。とくに貨幣の製造はなかったようである。

高麗橋から少し南へ歩けば、平野橋があり、その西方淡路町一丁目には**泊園書院跡**がある。それは、藤沢東がいが1825(文政8)年開いた私塾で、140年にわたって主宰され、その時の2万冊余りの蔵書は現在関西大学に「泊園文庫」として保存されている。また、東方の釣鐘町2丁目には、**釣鐘屋敷跡**があり、徳川3代将軍家光が大阪町中の地子銀(固定資産税)の免除を約束した時、感謝の気持ちを込めて、釣鐘を作り、大阪中に時を知らせた。

再び、河川公園の木々を眺めながら南へ行くと、大手橋付近で「東横堀川緑地」は終わり、川測道から地上の道へ上がる。川を挟んで東側の川沿いの道端には、赤穂討ち入りに力を貸した浄瑠璃「仮名手本忠臣蔵」で創作された人物・**天野屋利兵衛の碑**がある。さらに、近くの**薬王寺**(中央区中寺1)には、赤穂浪士の一人大高源吾の墓とその天野屋利兵衛のモデルとされる天川屋利兵衛の墓があるとされるが、境内は一般公開されていない。松屋町筋にはマイドーム大阪があり、その前の植え込みの中には**西町奉行所跡の碑**がある。さらに付近の大手通2丁目には、1870(明治3)年五代友厚の依頼を受けて、本木昌造が大阪で初めて設計創設した**大阪活版所跡碑**があり、大阪近代印刷発祥の地である。

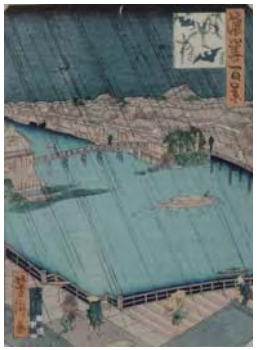
昔ながらの石造りの橋柱・高欄を持つ**本町橋**を眺め、そのまま南へ川沿いに歩けば、**農人橋**に至る。この付近で東横堀川は、急な細長いS字型に曲がって南へ行っている。開削当時お寺があって曲がったと言われている。また、また、この農人橋で東横堀川は、今まで南北に走っていた阪神

高速道路が同じく上を高速道路が東西に走る**中央大通**と交差する。すなわち、船場センタービル街の始まりであり、ビルの屋上には阪神高速道路が走っている。また、南西角には大阪市中央区役所がある。さらに、東方の南大江小学校(農人橋1丁目)の西側には地中を覗ける窓があり、今も現役で働いている**太閤下水**の一部が見える。再び、東横堀川沿いの道を南へ行けば、**久宝寺橋**、**安堂寺橋**がかかり、やがて**長堀通**との交差点、**末吉橋**にいたる。長堀通は、コラム1でも紹介しているとおり、大阪市内に張り巡らされた堀割の一つであり、大きい堀割であった長堀川の埋立跡の通りで、片側3～4車線がある上に、中央分離帯のある広い道路である。西へ行けば、東横堀川と平行に南北に開削された西横堀川との交叉点に4つの橋が架かっていたことで有名な**四ツ橋**がある。江戸時代当時から名所になっていたらしい。長堀川南側周辺には、江戸時代は住友銅精錬所があった。今は、遺跡として前住友銀行本店の一部になっている**住友銅吹き所跡**が残されている。

長堀通末吉橋を後にして南へ歩くと、**九乃助橋**、**東堀橋**、**瓦屋橋**から**上大和橋**で東横堀川は終わり、西へ流向を変えて、道頓堀川と名前を変える。これまで、川面を鬱陶しくしてきた阪神高速道路環状線はそのまま南へ向かう。

この付近の大阪の名所としては、**千日前通**を越えて南東に**生国魂(いくたま)神社**がある。神武天皇が九州から難波津に到達した無事を祝い、石山崎(現大阪城付近)に生島神・足島神を祭ったのが創建とされ、大阪城築城に際し、現在地に移された。大阪人には、「いくたまさん」として、親しまれている。また、上大和橋の東方には、大阪市歌の冒頭にも歌われている**高津宮**もある。さらに、大阪城南側の上町台地一帯は南の防衛をかねて、寺町とされた。

太閤下水


江戸時代の四ツ橋
(「浪花百景」より)

現在の四ツ橋付近

住友銅吹所跡

「いくたまさん」で親しまれる生国魂神社

大阪市歌にも歌われている高津宮

細川ガラシャの使った越中井

井戸や滝にまつわる遺跡では、まず上述の高津宮の西へ下ったところで、道頓堀川の始まる下大和橋南詰に**二つ井戸**があった。旧名二つ井戸町(現在道頓堀1丁目東)に、秀吉の時代釣鐘を鋳造するのに使う良質の井戸水が二つならんでこの地にあった。多分上町台地の伏流水がこの辺りで水脈となっていたのであろう。現在は近所の商店の商号などにいくつか残っている。後に述べる国立文楽劇場前に近々その遺跡が再建される予定である。

つぎに、久宝寺橋の東方、森ノ宮中央2丁目越中公園には、**越中井**がある。キリシタン大名の細

コラム ② 水門操作による水質管理

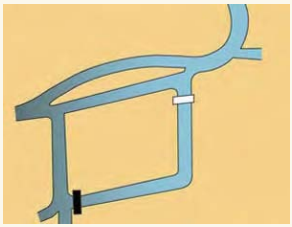
大阪湾の潮の干満に合わせた水門操作を行い、東横堀川・道頓堀川への寝屋川の汚濁した水の流入を防ぎ、大川(旧淀川)のきれいな水を導き入れている。過去には、コラム1で紹介したすでに埋め立てられた河川にもあったが、現在の河川では、堂島川水晶橋、土佐堀川錦橋、道頓堀川の大黒橋の橋脚下にも存在した。しかし、いずれも老朽化し、その存在役目が終了したので、その他の河川が埋め立てられたのとほぼ同時期に水門は除却された。現在の水門の設置理由として、大阪市ホームページでは、以下のように述べている。

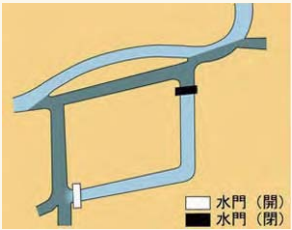
①高潮の防御　②水位の制御
③運河に必要な閘門機能
④河川水質浄化

水の動きは、次のようになっている。

◆上げ潮時：東横堀川の水門を開け、きれいな大川の水(浄化用水)を東横堀川・道頓堀川に取り入れる。その結果、道頓堀川・東横堀川には、きれいな水が貯留される。(下図上側)

◆下げ潮時：東横堀川水門を閉じ、寝屋川からの汚れた水が東横堀川・道頓堀川に入らないようにする。(下図下側)


〔 上げ潮時 〕



〔 下げ潮時 〕

川越中の守忠興の妻で、関が原の戦いで夫が徳川方についたために、石田三成に収監されそうになって、その命を自ら断った細川ガラシャが使った井戸として、大阪府史跡に指定されている。東横堀川東方にある**金明水井戸**は、太閤秀吉が掘らせたものと言われており、大阪城の天守閣登り口にある。そして、その底には金塊が沈められていて、この水を飲めばどんなものも無毒化されると言い伝えられている。

四天王寺の金堂の下にある青竜池から湧き出ている**霊水**が、亀井堂で滝となって流れ出ている。四天王寺の近く、伶人町5丁目には、その支院であり、京都の清水寺から本尊を迎えた言わば分家である**清水寺**がある。ここには大阪市内唯一の天然の滝である**玉出の滝**があり、滝の奥にある祠には不動明王が祀られている。滝に打たれながら真言を唱え、礼拝するといろいろの願いがかなうらしい。四天王寺の近くのこの付近は上町台地の西崖線にあたり、湧水が豊富にあって、天王寺の**七名水**(北から順に、**有須の清水**、**金龍水**、**増井の清水**、**安居の清水**(かんしづめの井)、**逢坂の清水**、**亀井の水**、**玉手の清水**)とされた。伶人町5丁目には七名水を再現した碑がある。また、この付近は、西崖線にあるがゆえに坂道も多く、口縄坂をはじめとした**七坂**(北から順に、**真言坂**、**源聖寺坂**、**口縄坂**、**愛染坂**、**清水坂**、**天神坂**、**逢坂**)と呼ばれる坂があった。口縄坂を登りづめたところには織田作之助文学碑がある、あるいは安居の清水のある安居神社には真田幸村戦死跡碑があるなど、七名水や七坂各所にいろんなエピソードがある。

これらの寺からの眺めは、まさに太古の昔ここから西は海だった事を物語るものである。

大阪城にある金明水井戸

四天王寺西門

四天王寺亀井堂の霊水

清水寺の玉出の滝

口縄坂

七名水を再現した碑

安井道頓碑

宗右衛門町

道頓堀界隈

3 道頓堀川

上記のように、上大和橋から西へ曲がると**下大和橋**があり、道頓堀川が始まる。江戸時代1615(元和元)年安井道頓が開削したものである。コラム1でも紹介したように、この下大和橋から少し下流から南へ**高津入り堀**が掘られていたが、1963(昭和38)年水質汚濁がひどくなって、埋め立てられた。少し下って**日本橋**(大阪では「にっぽんばし」という)北詰広場には、道頓堀川を開削した安井道頓を顕彰する**安井道頓碑**がある。日本橋もやはり公儀橋で、船場への出入り口であり、紀州藩や岸和田藩が参勤交代にも渡ったものである。

川沿いに北側を西へ下ると料亭が並ぶ**宗右衛門町**であり、川沿いに南側を下ると**道頓堀界隈**である。橋は、日本橋から下流西側へ向けて**相合橋**、**太左衛門橋**、**戎橋**、**道頓堀橋**、**新戎橋**、**大黒橋**、**深里橋**、**汐見橋**、**日吉橋**と続いて、道頓堀川出口で水門が造られている。

規制緩和の指定を受け、2004年12月から親水性を高めようと河川水面から80cm程度の高さに木製歩道**とんぼりウォーク**が設けられ、人々がいっそう道頓堀川に親しみを感じるようになっている。この有効活用を願って結成された市民運動もあり、その様子が内閣府都市再生レポートに掲載されたこともある。また、**戎橋筋**、**心斎橋筋**が河川と交差し、昼間は、若い男女の散歩道であり、夜は赤い灯、青い灯のネオン輝く繁華街となっている。とくに、戎橋付近は、プロ野球「阪神」の優勝に歓喜した人々が川に飛び込む騒動がテレビに放映され、良くも悪くも全国に名を知られるようになった。夏には、**難波八坂神社**の神事「船渡御」も行われ、夕方になると万灯も灯され、「灯篭流し」も行われている。

また、大黒橋の橋脚下には、コラム2で紹介した水門が設けられていた。この水門を利用して、河川浄化のための**エアレーション実験**（1968年）が大阪市立衛生研究所（当時）によって行われた。また、コラム1で紹介したように、この橋直ぐ下流には右岸に北から四ツ橋を経てきた西横堀川が流入し、ほぼ対面の南側には**難波新川**という入り堀も南へ伸びていた。その先には、江戸幕府が飢饉に備えて、米を備蓄していた難波御蔵があった。その跡は、幾多の変遷を経て、今やなんばパークスやクボタ本社棟などになっている。

その下流にある**湊町リバープレイス**は、深里橋の下流側に造られた施設で、音楽・パフォーマンスイベントや展示会に幅広く使用されている。　また、建物の一部は、阪神高速道路の湊町出入口として利用されている。また、橋上公園と併せて水上バスの**湊町船着場**もある。また、道頓堀川と平行して走っている千日前通の南側には、並んだように南海難波駅、湊町駅(現JR難波)、南海汐見橋駅が開設されて、南大阪からの鉄道の起点となった。

とんぼりウォーク

道頓堀川万灯祭

エアレーション実験

難波新川跡碑

湊町リバープレイス

貯木場で無くなった道頓堀川下流

紀州藩邸跡・高台小学校跡の両者を示す碑

大阪電燈西道頓堀発電所跡を示すレリーフ

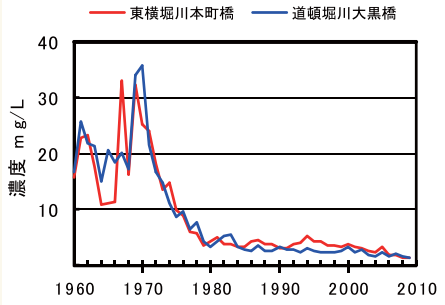
さらに、往時は大黒橋から西の西道頓堀川は貯木場であった。1967（昭和42）年護岸の両側に下水管を走らせ、道頓堀川幅が狭くなって、貯木場としての機能は失せた。道頓堀川と平行して走る千日前通りには、今も営業している材木店が所々に残っている。

また、道頓堀川北側南堀江には、加賀藩や紀州藩の蔵屋敷があって、その跡には高台小学校が建てられていたという**碑**や西道頓堀橋の北詰近くには、1889に作られた大阪電燈（関西電力の前身）西道頓堀発電所の跡を示す**レリーフ**も設置されている。また、道頓堀川に北側にあった堀江川周辺は、江戸時代開削当時の新地で、幕府

コラム ③　戦前から水質調査

大阪市では、戦前から環境目的に河川水質BODなどを測定しており、数多くあった水門の効果を研究した報文も出されていた。戦前昭和15年頃かなり汚濁が進んで、しかし、戦争激化により一時期水質回復が見られた。その後、経済の高度成長に水質汚濁対策や法規制が追い付かず、1970年代前半には非常な汚濁状態であった。1967(昭和42)年成立、70(昭和45)年改正された公害対策基本法などの法規制と国民的努力によって、図のようにその後水質は浄化された。東横堀川・道頓堀川の水質も歴史的には非常に清浄化された。近年のBODは、年平均値2mg/L以下で類型指定されているB類型基準を達成しているが、大腸菌群数が10^3 MPN/100mLを超えて検出され、遊泳には適さない、とされている。

ただ、コラム4でもわかるように、わが国では河川水には透明感が求められており、底質汚泥などの原因により透明感がとぼしく、河川の底が見えるには程遠い状態で、市民や人々の納得は得られていない。ただ、近傍の下水道管が現在合流式であり、豪雨時には合流汚水が両河川に流入するが、北浜逢坂貯留管という大口口径管が早くに完成すれば、その汚水も流入しないであろうから、改善されると期待したい。



〔東横堀川本町橋および
道頓堀川大黒橋のBOD経年変化〕

は待合茶屋も作らせ、能、文楽の興行などとともに行わせた大阪相撲の始まり、**勧進相撲興行地の碑**も建っている。

道頓堀川の終点は、日吉橋直下にある水門である。ここには、コラム2で紹介している回転式の**道頓堀川水門**があり、上に述べた水上バスなどが通る時は、道頓堀川の水位を一定にするために、パナマ運河のように水門内の上流側樋門と下流側樋門を操作して道頓堀川の水位と木津川の水位が異なっても通過出来るようになっている。これを越えると、木津川に入り、そのまま下流へ流れる木津川と西へ流れる尻無川の交差点となっている。その木津川に架かっているのが大正橋である。**大正橋モニュメント**には、大正島（当時はまだ大正区はなかった）に「渡し」しか行く手段の無かった1929（昭和4）年当時日本で最も長いアーチ型橋梁として建設された。現在の橋は老朽化がひどくなって、1974（昭和49）年わが国初の三径間連続の合成箱桁橋として建設されたとあった。その東詰すなわち道頓堀川最下流左岸側には、**安政大津波の碑**がある。これは、2011年に発生した東北地方太平洋沖地震と同程度と推定されている1854年に起きた安政大地震における大津波の被害を後世に伝えるために建てられた記念碑である。

さて、江戸時代船場が開発された当時は、船場の中すなわち道頓堀川北側は町衆の住む所であるのに対して、道頓堀川の南側は、いわば町はずれであり、芝居小屋や刑場が造られた。戎橋側から浪花座、中座、角座、朝日座、弁天座の5つの芝居小屋は「五つ櫓」（いつつやぐら）又は「道頓堀五座」と呼ばれた。「回り舞台」もここで発明され、以降全国的に広まった。また、戎橋南東

勧進相撲興行地の碑

道頓堀川水門

大正橋モニュメント

安政大津波の碑

竹本座跡碑

法善寺

水掛け不動

国立文楽劇場

黒門市場

の道頓堀には**竹本座跡碑**が残っている。初代竹本義太夫が1684（貞享元）年人形浄瑠璃の小屋として開いたものである。近松門左衛門とコンビを組み、興行的にも大成功をおさめた。あるいは、織田作之助の「夫婦ぜんざい」で有名になり、大阪芸人などに人気の高い**法善寺**もある。法善寺には、**水掛け不動**も祭られ、お参りする人々が絶えない。それらの人々を相手に、法善寺横町には店が並んでいる。千日前には、刑場や大規模な墓地もあり、法善寺と竹林寺が千日経を唱えて、菩提を弔っていた。

また、2010年8月15日お盆には、江戸時代の灯篭流しも復活された。その他、千日前通には、**国立文楽劇場**、大阪の台所**黒門市場**などが並んでいる。

コラム 4　多くの市民による河川保全

東横堀川・道頓堀川の環境改善を願う市民活動のネットワークも、純粋市民のものから半官製のものまで数多くある。その中でも「水都OSAKA」のように、半官製ながら数多くの市民も参加して、広範に広がっているのもある。

東横堀川・道頓堀川では、水辺環境38項目について川部会・近所の住民・ゼミの学生などが評価をおこなった。その結果は、東横堀川・道頓堀川は、水質はともかく、底泥の堆積などで外観上は相変わらず透明感がなく、評判は良くなかった。また、町内会の人たちに感想や川に対する思いを聞いたが、期待が大きいだけに、河川の現状に対する評価は厳しかった。

「川は今や、近寄るな危ない、ばかりだ。河川沿いを歩けるような親しめる設計が大切だ。ヨーロッパのように運河で船を浮かべ、ワインを飲み、ピアノやギターでコンサートをやるなどの音楽会が夢だ。これが水辺ではないか。もっと、具体的に水質をきれいにする方法をNGO、学校の先生が提示してほしい」などの声が印象的だった。その音楽会も2011年夏のタベには、道頓堀川で実現した。

〔 道頓堀川船上の音楽会 〕